

## 社会科教育実践研究の取り組みと授業評価アンケート

社会科教育講座・駕原 進

### 1. はじめに

大学院教育学研究科教科教育専攻社会科教育専修における社会科教育実践研究は、専修所属の大学院担当教員全員が担当する通年開講、4単位の取得が修了要件となっている。

社会科教育に関する教材内容、教材開発、指導法などについて学習することにより、理論的・実証的な研究を行なう上で基本的な能力が育成されることを授業の目的としている。授業の到達目標は、社会科教育に関する小・中・高等学校での授業研究をもとに、教材内容、教材開発、指導法などについて、理論的・実証的に研究できるようになることである。

履修登録者は2人、授業評価アンケート（自由記述）回答者は2人、単位認定者は2人であった。今年度は、報告者が中心となって進め、必要に応じて、専修担当教員の指導、協力を得た。また、高等学校での「南北問題」の授業開発に取り組んだため、研究授業の実施を附属高等学校に依頼し、快諾を得た。高校（正確には、農学部附属農業高等学校3学年）の教育課程で言えば、公民科の現代社会の一小単元の授業実践に取り組んだことになる。

前学期には、授業開発に必要な社会科授業論や授業構成論を、学生とともに勉強した。また、どのような題材を教材に変換して授業開発を行うのかの吟味をしていった。最終的には、「南北問題」を核とした授業開発をすることを決め、夏季休業中には、教材研究に勤しんだ。また、関係する専門分野の教員の指導を仰いだ。

後学期は、教材研究の成果と社会科授業論を踏まえ、授業開発を進めた。授業計画案を作成し、その修正を幾度となく行った。大学において、模擬授業を実施した上で、附属高等学校にて、研究授業を合計4時間

（1学生当たり2時間）実施した。附属高校の先生方を交え、専修担当教員も参観し、研究授業後の協議を行った。

それら一連の手続きを経て、学生自身が、開発した授業計画案をさらに数度改善し、「南北問題」を核とした社会認識教育としての授業モデルを作成した。

### 2. 授業評価

履修者2人の授業評価アンケート（自由記述）には、次の内容が寄せられた。

社会科教育実践研究では、高等学校の現代社会の中から「南北問題」という大きなテーマを取り上げ、教材研究、授業作り、授業実践、授業改善を行ってきました。授業実践までの数ヶ月間に渡って、高等学校公民科の学習指導要領の確認や教材研究を行ってきましたが、一つの授業を作り上げるためには、多くの時間を要し、常日頃から様々な分野に興味関心を広げていくことが大切であるということを感じることができました。また、今回の授業実践では、教育実習とは置かれている環境も雰囲気も全く違うということで、いい緊張感で授業実践に臨むことができ、とても良い経験をすることができました。

まず、授業実践における教材研究では、「南北問題」という大きなテーマの中から「南北問題の歴史的過程と諸機関の設立」という点に自分自身のテーマを絞り込んで、教材研究を行ってきました。「南北問題はいつ頃から問題視されはじめたのか」あるいは「南北問題の解決のためにどのような取り組みが行われているのか」など歴史的過程の中から問題点を導き出し、文献を中心として教材研究を行いました。また、

諸機関の設立と動向については、文献の他に各機関のホームページ等も参考にしながら、より新しいデータを提示できるように努めました。

この教材研究は、授業を行うことによって改めて痛感させられたことでもあります。授業を行う上で核となり重要な部分であると考えることができ、実際に教壇に立って授業をすること以上に重要なことであると身を以って感じるようになりました。また、教材研究を軽視した授業というのは、内容の薄い授業となってしまう、生徒の心に響く授業をすることができないということも、授業実践を通して改めて気付くことができました。教材研究とは、多くの時間を要し大変な作業ではありますが、よりよい授業を行う上で必要不可欠なものであるということ、授業実践を通して改めて学ぶことができたと思います。

そして、授業実践では、数ヶ月間に渡って教材研究で調べてきたことを、50分間という短い時間に集約し、正確な情報を分かりやすく且つ丁寧に教えることを心がけて授業作りを行い、実際に授業を行いました。結果的には、語彙の不正確さやデータの不正確さなど、多くの反省点が残ってしまいました。しかし、授業実践で多くの反省点を残し、悔しい思いをしたことは、逆に自分自身にとってよかったことであると感じています。それは、冒頭でも教育実習とは全く違う雰囲気であったと述べたように、授業に求められているものも授業内容の質も教育実習とは全く異なるものであり、教壇に立つことの重みを言葉では表すことができない本当の意味で感じるようになりました。やはり、教壇に立つ以上は子どもたちに正確な情報を適切な言葉で表現し伝える必要があります。この授業実践を通して、そのことの難しさや大切さというものを身に沁みるほど感じるようになりました。反省点が多くとても悔しい思いをした授業実践ではありましたが、将来教員を目指している私にとって、本当にいい経験をする事ができたと思っています。

そして、授業実践を終えた後の授業改善については、授業実践での反省点を生かして学習指導案の書き換えの作業から行っていきました。「この授業で生徒に何を伝え

たいのか」ということから再検討していき、授業展開の順序を見直し説明が不十分なものには説明を加える作業をしていきました。この授業改善を行う中では、授業作りをしながら感じたことでもあります。教材研究に終わりはないということに気付かされました。この実践研究でも、長い時間をかけて様々な文献やデータに目を通して教材研究を行ってきましたが、それでも情報が不足していたり、データに対する認識が間違っていたりと不十分な点が多く見わかりました。このような反省点から、どれだけ多くの情報を収集したとしても、自分の中に疑問が残る以上、教材研究を止めては駄目だということ学びました。自分自身が納得のいく情報を得ることができるからこそ、良い授業ができるのではないかと改め考えることができました。

この社会科教育実践研究では、長い時間をかけて一つの授業を完成させ、それを研究授業として実践してきましたが、本当に多くのことを学ぶことができたと感じています。実際に時間をかけて教材研究を行い、それを基に自分で授業を作り実践したことは、大きな自信に繋がるとともに大学生活での大きな糧になると考えています。このような機会を与えてくれた附属高校の先生や担当の鴛原先生には感謝の気持ちでいっぱいであり、ここで得たことを十分に活かし残りの大学生活も頑張っていきたいと思っています。(以上Aさん)

今回の社会科教育実践研究では、南北問題という地球的課題を取り上げ、高等学校三年生に授業を実施した。その実践の前準備として、約半年をかけた教材研究に臨んだ。この学部生のときにはできなかった長い時間をかけた教材研究は、自分授業づくりに対する考えや、世の中の事象の捉え方が、非常に甘いものであったことに気づくことができた。

南北問題というものに対しては、教科書で学んだ程度のことしか把握をしていなかった。なぜこの題材を選んだのかという理由については、自分にあまり関りのないものを選ぶことで、その知識を自分のためにも補うことができるという考えからのこと

であった。しかし実際に深く事象を捉えようと教材研究に取り組む中で、文献調査やNPO活動関係者の方から聞き取り調査をするにつれ、自分の南北問題に対する認識の間違いを目の当たりにすることになった。まず自分にとって南北問題はかかわりがあるとしても、間接的なものでしかないという考えがあった。しかし間接的どころか、北にあたる先進国の住人一人一人の行動が、南にあたる発展途上国の人々の暮らしを左右していることを知ったのである。南北問題の歴史は根深く、複雑なものであることもそうであるが、自分とどのようなかかわりがあり、それを長く知らずに過ごしてきたという衝撃が勝った。その自分とのかかわりというのは、単なる国同士の貿易関係であるとか、ODAのような支援関係のことではなく、南北の構造関係のことである。文献調査をする中で知ったガルトゥングが提唱する構造的暴力によると、南北問題はその表れであり、その構造の中には国同士、国の内部にまで関る複雑な構造図があり、自分もその中に含まれているということである。その構造的暴力によって南にあたる発展途上国、その中でも一般住民の人々は孤立している状態であるという。その構造的暴力を南北問題の本質として捉え、問題の現状や解決への道を調査した。

実際の授業づくりでは、生徒たちに対して難しく考えることなく、感じるままに考えてほしいということを訴えることで、生の感情と生徒視点の純粋な考えを引き出そうと試みた。そのために自分の担当時は概要の説明ではなく、構造的暴力の典型化を試みてモザンビークを一例として提示し、具体的な彼らの暮らしの様相と日本との貿易やNPOを中心としたかかわり、そして自分たちとのかかわりを見てもらうような授業設定をした。具体例を出すことで、教科書に出てくるような重要用語は噛み砕いて説明し、あくまでもわかりやすくしようとした。南北問題という事象を覚えるのではなく、まず知ってもらい、理解できずとも感じてもらうとしたのである。しかし授業終了後に提出してもらったアンケートをみると、題材の難しさや自分の授業づくりの不手際から、やはり半数の子は難し

いと感じたようである。それでも授業中の生徒たちの意見や態度をみる限り、理解が困難ながらも指名すれば必ず自分の考えた答えを提示していたことから、この問題について一生懸命に考え、衝撃も少なからず受けていた模様である。大学生に対して模擬授業を行なったときとは異なる、その問題を必死に考えた生の感情が伝わってきた。大学生からは模擬にでは充分すぎる、模範的な答えを提示してもらえたのだが、知識を身につけてきた者たちは既に知識としてあるその問題の解決に導くような答え、何より私がどのような展開を求めているかということに察してしまったような答えが多かった。しかし高校生たちは、私から与えられた情報の中だけで考え、感じていた。それによって、未知なる物に対することで、知識をつけた我々よりも、もっと本質的な部分でこの南北問題を重く受け止めていたように感じる。

反省点は、具体例としてあげたモザンビークについての調査が不十分であったことである。それにより、南北問題と構造的暴力の関係をうまく典型化できず、生徒たちの理解を困難にさせてしまった。モザンビークの植民地時代からの歴史の変遷、独立後の貿易やODA関係について、深く調査をすべきであった。

今回授業を行なったことで、子どもには難しい、まだ早いと思えるものこそ、実は知っておかなければ、衝撃を受けなければならぬのではないかと考えた。段階に正確で豊富な知識の習得を経て、地球的課題を考えていくという方法も重要であるが、前情報もなく知ることにも意義があるのではないか。子どもであるからこそ導かれる考え方も存在するのではないか。今回の実践研究では、そのような可能性が示されたように感じる。そのためにも問題を正しく理解できるような、十分な教材研究が重要である。さらなるよい授業づくりができるよう、この経験を今後活かしていきたい。  
(以上、Bさん)

### 3. おわりに

今回の授業に関しては、附属高等学校及

び附属高等学校の先生方のご理解とご協力により、とても有意義なものとなった。特に、研究授業の場、そして、研究協議にて貴重なご意見を提供していただいた辻公正先生、森良樹先生には、厚く御礼を申しあげる。

また、まつやまにて、「南北問題」に正面から対峙しておられるNPO法人「えひめグローバルネットワーク」にもご理解とご協力を賜った。特に、竹内よし子代表には、貴重なお時間を割いていただき、大学にて、あるいは事務所等にて、ご指導をいただいた。

しかしながら、ご協力いただく組織や人が増えれば増えるほど、それらの調整をする担当者は……。次年度からの新科目に、若干？の不安を抱いているというのが正直なところである。

学生自身が授業開発をし、修正し、授業モデルを作成していく中で、授業の世界が、いかに現実の（あえて言えば）広い世界とつながっているか、そして、その広い世界の中をサーチライトのように照らしているのが授業であるという関係について、体感できたと思う。この点は成果と言えよう。

一方、社会科教育研究をしているものとして、授業評価アンケートの記述が、経験の修得（「貴重な経験であった……。」）のレベルにとどまっていることを、非常に恥ずかしく思う。経験を通して、授業を客観的（間主観的）に、開発したり、みたり、改善したりすることが、社会科教育研究としての実践研究である。その点を深めることができなかつた。このことは、本当に情けなく思う。これは、報告者自身に自分の研究に対する真摯さがなく、非常に傲慢になっていたからである。授業評価アンケート（自由記述）が証拠である。